

A 苦痛を和らげる薬を貰いながら死にたい

日本でも早く安楽死法を 通してもらおうしかなない

「安楽死で逝きたい」。橋田壽賀子氏が文藝春秋(16年12月号)で公言して以降、「尊厳ある死」を巡る議論が喧しい。今年83歳を迎える作家はどう考えるか。

死に方

がおりないのである。まあ、死んでしまえばあとのことはどうでもよいようなものだが、やはり家族が困るようでは可哀想だ。

B 認知症になって家族に迷惑をかけ長く生きるよりは早く死んだ方がいいと望む人は多い筈だ。そして同じ死ぬなら苦痛のない方法で

では、事故死または他殺と見せかけて自殺するといふのはどうであろう。誰でも考えることであり、これをメイントリックにしたミステリーはいっぱいある。それに生命保険会社は自殺なのに保険金を取られては損をするから、懸命になって自殺であることを証明しようとする。だから当然のことながらこのトリックは先刻ご承知、あらゆるミステリーのトリックを調べ盡している。残念ながら素人考えで成立つようなトリックはすぐに見破られてしまうのである。

とも望むだろう。そんなことを考える人は当然まだ認知症になっていない。頭のはつきりしている老人が安楽死を求めてもその家族の多くは反対するだろうし、

ならば自殺する気で第三者から殺されるという手段はどうであろうか。どう見てもアブナイ奴に喧嘩を売るといふ方法である。相手はやくざかチンピラであり、罰せられて当然の輩だ。だがこれにも難点が二つある。一はこちらも最小限の労力を要する上、さらには相당한苦痛を伴うことである。要するに安楽死にはならぬ

そもそも安楽死は法的に認められていない。つまり病院では安楽死をさせてくれない。これを自分でやろうとする安楽死ではなく自殺ということになってしま

最近、老人の運転する車が

C 法的には有罪だ。これだと原則、家族に生命保険

の事故が多発しているが、わざと車で大事故を起して自分も死ぬというのは甚だ迷惑な死にかただ。家族も責められることになり、下手をすれば何人も巻添えにして自分だけ助かったりする。これはもう目も当てられない結果となるからやめた方がよからう。



作家 筒井康隆

TSUTSUI Yasutaka

共同通信社

う言い逃れもできる。しかし果たして日本の生命保険会社がこれを認めるかどうか。

こうなれば日本でも早く安楽死法案を通してもらうしかない。日本でなんとか認められているのは一種の尊厳死で、これは自然死とも言われていて医師が延命装置を断ったり点滴の針を抜いたり薬を服ませなかったりして延命治療を行わないことである。治療を絶つことによる苦痛が伴うから安楽死ではない。やれやれ、やはり苦痛なしに死ぬといふのは日本では至難の業であるらしい。おれにとつて

D 楽しみといえ、まだ未体験のモルヒネを打つてもらうくらいのものか。こうなれば次のように嘯いて自分を宥めるしかあるまいね。「せつかく生きて来たんだから、死の苦痛というものを味わわずに死ぬのは損だ」

E だつて昔は医者もあまりおらず、たいいていの人は自分の家でもがき苦しんで死んだんだもん。それに比べれば苦痛を和らげる薬を貰いながら死ぬ方がずっとましというものであろう。

F だつて昔は医者もあまりおらず、たいいていの人は自分の家でもがき苦しんで死んだんだもん。それに比べれば苦痛を和らげる薬を貰いながら死ぬ方がずっとましというものであろう。